

音楽理論研究会通信 第7号

Web Site:<http://sound.jp/mtsj/>

2007 年 5 月 1 日発行 1. May. 2007

目 次 contents

研究会ご案内	第 10 回 2007 年春期例会 発表概要
第 10 回 2007 年春期例会	研究会報告
第 1 回東京例会	第 9 回 2006 年秋期例会 レポート
第 11 回 2007 年秋期例会	事務局より

研究会ご案内

■◇音楽理論研究会第 10 回例会(春期)

日時： 2007 年 5 月 20 日 (日) 午後 1 時 50 分開始

会場： 国立音楽大学 A I (アイ) スタジオ

(☎042-573-5633)(国立音楽大学付属幼稚園地下)

JR 国立駅南口 線路沿いに立川方向へ徒歩 3 分

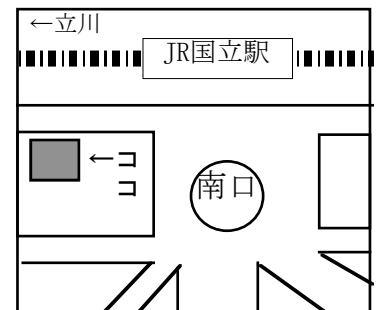
参加費： 一般 1500 円／学生 500 円

内容： 1 修士論文発表 発表者 稲崎 舞

2 旋法と和声：ガチンコ対決 発表とシンポジウム

講師 見上潤 小川伊作

【会場地図】



※発表概要は 2 ページ以降を参照してください

■◇NEW! 音楽理論研究会第 1 回東京例会

日時： 2007 年 7 月 29 日 (日) 午後 1 時～5 時 30 分

会場： 杉並公会堂 A スタジオ JR および東京メトロ荻窪駅北口から徒歩 7 分

〒167-0043 東京都杉並区上荻 1-23-15 TEL:03-3220-0401

<http://www.suginamikoukaidou.com/access/index.html>

参加費： 一般 1500 円／学生 500 円

内容： 研究発表 (予定)

今野哲也 「クリスタル和音 理論化への試み——古典から近代まで——」

小川顕人 「ドビュッシーとラヴェルの弦楽四重奏曲に見る偶成和音の用法分析」

岡崎登代子 「J. S. バッハ 平均律クラヴィア曲集第 2 巻第 13 番 Fis-dur フーガをめぐって」

お問い合わせ：音楽理論研究会東京支部 dolcecanto2003jp@yahoo.co.jp (見上潤)

■◇音楽理論研究会第 11 回例会(秋期)

日時： 2007 年 10 月 7 日 (日) 午後 1 時 50 分開始

会場： 国立音楽大学 A I (アイ) スタジオ

内容： **注目!** 「音楽言語学の試み」 講師 島岡 譲

※ 各研究会終了後、懇親会を予定しています。こちらへも奮ってご参加を!

[第10回例会 発表概要]

稲崎 舞：ストラヴィンスキー《ふくろうと小猫ちゃん》分析と解釈

——2006年度桐朋学園大学研究科修了論文『ストラヴィンスキー後期の「声を含む作品」～

12音技法とテキスト解釈～』より——

イーゴル・ストラヴィンスキーは、未だに「歴史的に大センセーションを巻き起こした《春の祭典》の作曲家」として語られ、とりわけ3大バレエを代表とする彼の初期作品に関する研究は数多くある。それに対し、彼の後期作品は、あまりにも過小評価されているように思われる。そのようなストラヴィンスキー研究の現状を打破すべく、これまで、後期に特化した研究を行ってきた。今回、2006年度桐朋学園大学研究科修了論文として執筆した『ストラヴィンスキー後期の「声を含む作品」～12音技法とテキスト解釈～』をふまえた発表を行う。この論文では、「12音技法で書かれ」「編成に声を含んでいる」9作品を対象とし、ストラヴィンスキーの12音技法の使用法とテキストの扱い方について論じているが、その中から、ストラヴィンスキーが最後に作曲した作品《ふくろうと小猫ちゃん》を選んだ。この作品は、声とピアノというシンプルな編成で、テキストはエドワード・リアーの同名のナンセンス・ソングからとられている。詩人になる前は製図者でありイラストレーターであったリアーは、そのキャリアを生かし、挿絵付きの詩集を何冊も出版した。「ふくろうと小猫ちゃん」では、ふくろう、小猫ちゃん、ぶたさん、七面鳥の4匹の動物が登場し、ナンセンスな物語を繰り広げる。この4匹の動物を、ストラヴィンスキーは、詩人の設定したキャラクターとはいささか異なる表現で音楽化している。それは、音楽構造から読み解くことができた。ストラヴィンスキーは、ぶたさんが登場する場面で、12音技法の移置形を使用したり、装飾音で飾ったりすることで、物語を見事に展開させたのである。今回の発表では、作品の実演と共に、音楽的解釈の可能性も考察する。

見上 潤：旋法理論 再構成の試み3 教会旋法の巻 ～今日からあなたも教会旋法の達人！～

「どうしたら教会旋法を簡潔かつ明快に理解できるであろうか？」

「どうしたら教会旋法と調性との関係をとらえられるだろうか？」

「どうしたら教会旋法をアナリーゼに応用できるだろうか？」

以上の問題にこたえるために、教会旋法およびその周辺の問題を、「総合和声」原理編の成果を踏まえながら研究した。

「ギリシア旋法」、「変格旋法」、「第X旋法」、「教会旋法におけるドミナント」等の、混乱を生じさせる可能性がある情報を捨象することによって純理論的にシステムを構築し、立体的な知識の織物を形成することを目論みつつ、従来の教会旋法理論を以下のような過程を経て再検討した。

各教会旋法の構造をテトラコードの組み合わせととらえ、cを主音にして比較検討し、7つの教会旋法を妥当な順序に並び替え、「調の枠組み図」によって意味づけることによって、“翳り”概念との関連を明らかにした。これによって移動的的分析もクローズアップされた。また、各教会旋法の各音度の上に生じる和音の構造を比較によって各教会旋法の性格を明らかにし、調性の分析も併記することによって、教会旋法と調性の関連を明らかにした。さらに、各教会旋法の固有和音を主和音とする調性すべての領域を、「ハイパー固有和音調」と命名し、主調に対する各内部調の性格を明らかにした。

このようにして、表裏一体の関係であると考えうる調性と教会旋法の2重の観点から、ルネサンスから近代までのいくつかの実作品を、「ブレインストーミング法」を用いて分析した。教会旋法の周辺の問題としては、「ジブシー音階」、「トリコードと5音音階」についてのみ言及する。

今後の建設的な議論の土台になることを願って行ったこれらの教会旋法の研究を通じて、その面白さ・楽しさ・必要性を感じていただければ幸いである。

以前私はどうみても調性的なバッハのフーガを旋法的観点から分析することを試みた。今回はどうみても旋法的な（その根拠は各曲の冒頭にその曲の旋法名が書かれている）曲を、和声的に分析しようというものである。その作業の前段階として、これまで我が国で当然のごとく使用されてきた「調」や「調性」、「旋法」と「旋法性」といった用語の基本的な整理を行う。次に 16 世紀初めに出版された曲集より 1 曲選び、和声的な分析を試みる。こうすることで従来断片的・抽象的に語られることの多かった旋法的和声の実作品にどのように現れているかを検証することになる。そこでは旋法的和声（非機能的和声）と調性的和声（機能的和声）の共存が見られ、歴史的視点からは、和声が機能を獲得していく過程と捉えることができ、また音楽理論的視点からは旋法と和声の共存が可能であることが明らかになる。

■◇音楽理論研究会第 9 回例会（2006 年秋期）レポート

講演 「フォーレの歌曲 詩と音楽の分析」

島岡 譲先生・金原 礼子先生

講演は、フォーレの歌曲<リディア>、<イスファンのばら>、<月の光>の 3 曲を 1 曲ごとに、金原先生の歌と島岡先生のピアノによる演奏→金原先生の詩の解説→島岡先生の楽曲分析の順に進められた。まず、金原先生からフランス歌曲に関して次のようなお話があった。

「メロディー」としてのフランス歌曲は、ドイツ・リートより 30 年ほど遅れて作曲されるようになった。「メロディー」の由来は、ベルリオーズの《アイリッシュ・メロディーズ》(1830) とされているが、この作品は実際にはフランス語の原詩によるものではなく、タイトルからもわかるようにアイルランドの詩人トーマス・モア¹の仏訳詩に作曲されたものであった。フランスの抒情詩は、1815 年のナポレオンの完全なる敗退後、王政復古にあたる 1820 年代からみられる。フォーレの歌曲は、歌唱パートの形態から①歌謡的②叙唱的③朗唱的の 3 つの種類に分けることができる。

<リディア> (1870 頃)

原詩はルコント・ド・リル (1818~1894) の『古代詩集』(1852) に収められているが、フォーレは一部手を加えている。テキストの響きとしての美しさを追求してのものと推測される。詩は、4 行詩 4 節から成る。

曲は、ほぼ有節歌曲となっており、開いた二区分形式となっている。そして、概ね詩の 2 行分が歌唱パートの 4 小節に相当する。タイトルにあるように、リディア旋法を用いたことで有名な作品であるが、実際には歌唱パートにはリディア旋法がみられるものの、そこにあてがわれた和声、即ちピアノ・パートは調性和声となっている。第 10 小節からの潜在的属音保続、第 16 小節の倚音に対するゆれによる「2 重のゆれ」、有節歌曲の繰り返しの部分におけるダイナミクス・音価の変化といった 1 回目とのさりげない差異など、曲全体に趣向が凝らされている。潜在的属音保続では、第 13 小節で響く 2 度調の「クリスタル」な響き（シューマンも好んで用いた）がすぐ後の「かげり・哀愁」と共に際立っている。また、17 小節のような準固有和音の借用は、ブラームスも好んで用いたもので「恍惚」な響きをもたらす。曲の終わり、コーダ（最期の 5 小節）にみられるピアノ・パートの左右の手の反行する音階による「両外声逆置」、そして、そのために左手の終止形が右手の旋律より上声で響くといったことは、「舞い上がり、天にも昇る気持ち」であるかのようだ。

<イスファンのばら> (1884 頃)

原詩はルコント・ド・リル (1818~1894) の『悲劇詩集』(1884) に収められている。つまり、この曲は、詩集の出版と同年に作曲された。この曲では、フォーレは原詩を一部削除しているが、このようなことを、フォーレはよくやっていたようである。「リディア」と同様に、芸術歌曲としての発音上の理由によるものと考えられる。しかし、このように詩に手を加えることは象徴派の詩になってからはみられない。「イスファンのばら」とはイランのばらという意味で、この頃のアラブ志向という社会的背景がうかがえる。詩は高踏派に属するもので、12 音節の 4 行詩 6 節がフォーレの削除により 4 節となっている。

曲は、ソナタ形式に近い形となっている。そして、原詩の一部を削除することが、曲の構造に生きた形で反映されている。それは、提示部（第 21 小節までの第 1 節と第 40 小節までの第 2 節は‘過去’）、展開部（第 58 小節までの第 3 節は‘現在’）、再現部（第 4 節は‘未来’）と曲の形式と詩の物語性との一致にうかがえるが、これはフォーレの作曲家魂とも言えるだろう。提示部の前半は、主調（ニ長調）の主和音を中心とし、所々に「ゆれ」がみられる「線成和音」となっている。そして、歌唱パートにも「ゆれ」がみられる。この旋律は 5 音音階的である。第 1 節の終わり（第 21 小節）では、3 度調が一瞬現れるが、それを打ち消すかのように主調に戻って第 2 節を始める。第 2 節は、第 1 節の繰り返しであるが、この節の終わりの部分（第 40 小節）では、3 度調を打ち消すことなく、下屬調で展開部を始める。3 度調は、Ⅲの和音が他の和音に比べ調性和声においては機能的にはっきりしないため、「はかない」印象を醸し得る。このように、第 1 節の終わりではその「はかなさ」を打ち消し、第 2 節の終わりでは打ち消さないということは、詩の内容に通じるものがある。また、再現部では提示部と異なり、主和音の基本形ではなく第 1 転回形で始まるため、60 小節におけるⅢの和音の「はかなさ」が際立つ。

＜月の光＞

原詩は、ポール・ヴェルレーヌ（1844～1896）の『艶なる宴』（1869）に収められている。フォーレがヴェルレーヌの詩を扱った最初の作品である。ピアノ・パートが歌唱パートに伴うものとしてではなく、メヌエットとして独立し得るほどのものであることで有名なことから、作曲家としてのターニング・ポイントの作品となっている。詩は、4 行詩 3 節から成る。韻を踏んでおり、とりわけ、第 3 節の第 2 行の終わり‘arbres’が第 4 行の終わり‘marbres’の中に含まれているなど、手の込んだものとなっている。このようなことは、日本語の「海の中の母」に通じるだろう。

曲は、ロンド形式に近い循環形式（第 17 小節までの A、変ロ短調→第 25 小節までの B、変ニ長調→第 37 小節までの A、変ロ短調→第 55 小節までの C、変ト長調・変ホ短調・変ロ短調→A、変ロ短調）となっている。第 1 節及び第 2 節が A、第 3 節が B、第 4 節が C に相当し、最後の A はピアノ・パートのみのコーダとなっている。また、A の冒頭で響く「月明かり」を思わせるかのようなドリアの和音は、最後の A の再現では響かない。左手は拍頭のない尻上がり 16 分音符で開始する。そして、B 及び C において音価が 8 分音符に変化する際も、拍頭のない音型となっている。B の終わりの右手には、冒頭の右手の Des→Es→F の「書かれた rit.」がみられる。また、C の冒頭の歌唱パートにはリディア旋法がみられる。

このように、フォーレの歌曲をご専門の異なる 2 人の先生方から講演をしていただいた。そして、演奏→詩の解説→楽曲分析という過程を、1 曲ごとに丁寧に踏んでくださった。また、金原先生の原詩とフォーレによる変更を並置された資料、島岡先生の楽曲構造を視覚的に捉えることのできる分割譜・和声を明記された分析譜といった資料により、先生方のなされた研究をその過程から辿ることができ、大変有意義な時間を過ごさせていただいた。1 人の人間が専門的に研究することには限りがあると思うが、作品自体、2 人の芸術家によって生み出されたものであることを考えると、今日の講演のように、学問の分野を線引きすることなく他の学問分野にも研究を開いていくことの大切さを改めて感じた。

（レポーター 斉藤 紀子）

■ ◇事務局より

「音理研通信」第 7 号をお届けします。内容は来る 5 月と 10 月例会のご案内と、2006 年 10 月例会の報告です。例会報告は斉藤紀子さんによるレポートをいただくことができました。ありがとうございます。第 4 回大分例会のレポートは再び見上潤さんをお願いしてありますが、5 月例会当日配布の予定です。今回のニュースとしてはなんとといっても音理研東京支部の立ち上げと第 1 回東京例会の実施でしょう。5 月例会で研究会も 10 回目！10 年期第 2 期スタートの秋期例会は島岡先生の最新の研究発表！！ぜひ多くの方が参加されることを願っています（レイアウトを少し変えてみましたがいかがでしょうか）。

音楽理論研究会事務局 ホームページ：<http://sound.jp/mts/j/>

〒870-0833 大分市上野丘東 1-11 大分県立芸術文化短期大学音楽科 小川研究室気付

TEL & FAX 097-545-4429 Email:ogawa@oita-pjc.ac.jp